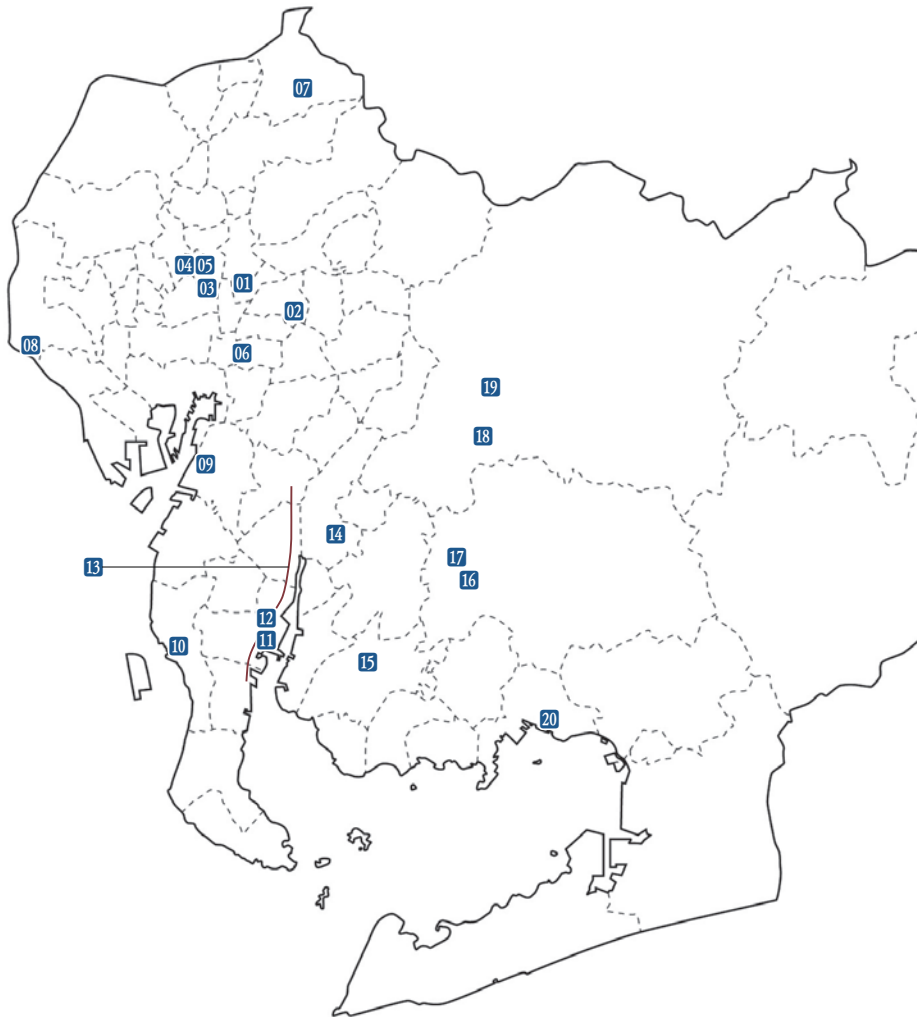


# 愛知県

## 産業遺産所在マップ



- 01 文化のみち二葉館（名古屋市東区）
- 02 東山植物園温室〔前館〕（名古屋市千種区）
- 03 ノリタケの森（名古屋市西区）
- 04 豊田佐吉の G 型自動織機（産業技術記念館、名古屋市西区）
- 05 トヨタ AA 型乗用車（産業技術記念館、名古屋市西区）
- 06 ブラザーの家庭用ミシン  
（ブラザーコミュニケーションスペース、名古屋市瑞穂区）
- 07 名古屋のボンボン時計（博物館明治村、犬山市）
- 08 船頭平閘門（愛西市）
- 09 カゴメ記念館（東海市）
- 10 常滑焼の土管（INAX ライブミュージアム、常滑市）
- 11 ミツカン工場群（半田市）
- 12 半田赤レンガ建物（半田市）
- 13 JR 武豊線（武豊町～大府市）
- 14 依佐美送信所記念館（刈谷市）
- 15 西尾劇場（西尾市）
- 16 岡崎信用金庫資料館〔旧・岡崎銀行本店〕（岡崎市）
- 17 八丁味噌 カクキュー（岡崎市）
- 18 明治用水 旧頭首工（豊田市）
- 19 百々貯木場（豊田市）
- 20 蒲郡クラシックホテル〔旧・蒲郡プリンスホテル〕（蒲郡市）



和洋折衷のデザインが斬新な二葉館の外観

介が慶応義塾の学生だった17歳の頃で、乗馬の練習中に野犬に襲われた14歳の貞奴を助けたのがきっかけだった。

二人は恋に落ちるが、かわず、その後、桃介は福沢諭吉の婿養子となって実業家の道を歩み、貞奴は芸妓になった後に「オッペケペー節」で知られる川上音二郎と結婚、米国公演で女優としてデビューし、芝居の道歩んだ。

再び二人の道が交錯するのは、音二郎が亡くなり、一周忌も過ぎた1912年（大正元年）頃だ。桃介45歳、貞奴42歳で、恋仲というよりは、事業パートナーのような関係が新たに始まった。

桃介は14年（大正3年）、名古屋電灯社長に就任し、水力発電の普及に意欲を燃やす。桃介にとって、貞奴が長年培った政財界とのパイプが不

可欠だった。

貞奴は18年（大正7年）、女優を引退し、桃介の支援で名古屋市に紡績会社「川上絹布」を設立した。わずか2年で倒産するが、「女工哀史」の時代に、労働時間は午前9時から午後5時まで、しかも毎時15分の休憩を取り、昼休みにはテニス、夜はお茶、お花の稽古と、貞奴の夢を実現した優雅な会社だった。

貞奴の女優引退の年、二葉御殿の建設が始まった。

**電気の憧れ駆り立てた御殿**

二葉御殿は、米国風の住宅を日本に持ち込んだ東京・虎ノ門の住宅建築会社「あめりか屋」が請け負った。

洋風邸宅の象徴として、軒の方で急に折れ曲がるマンサード屋根（腰折れ屋根）を採用し、大広間のステンドグラ

名古屋市東区

# 文化のみち二葉館

貞奴と桃介の夢の拠点だった大正の電化住宅



ステンドグラスと照明で、光にあふれる大広間

名古屋市東区。名古屋城の東にある白壁・主税町・榎木町は、大正から昭和初期にかけて名古屋の財界人らが多く移り住んだ高級住宅地だ。

戦時中の空襲を免れ、今も当時の面影を残す町並みで、赤い瓦葺き屋根がひととき印象的な洋風邸宅があった。1920年（大正9年）に完成した「文化のみち二葉館」（旧川上貞奴邸）

である。

「日本の女優第1号」として知られる川上貞奴が、かつての恋人で、当時は事業パートナーだった「電力王」福沢桃介とともに住んだ。

桃介は当時、水力発電の将来性に着目し、木曾川水系に水力発電所を次々と建設している最中だ。地名の東二葉町（現・白壁）にちなんで「二葉御殿」と呼ばれた邸宅は、桃介の政財界工作の拠点であり、「電気のシヨールーム」の役割も担っていた。

## 恋仲というよりパートナー

桃介と貞奴の出会い、桃

## ●アクセス

地下鉄桜通線高岳駅から徒歩10分。名鉄瀬戸線尼ヶ坂駅から徒歩12分。

●文化のみち二葉館（名古屋市東区榎木町3-23）

開館時間10:00～17:00。月曜（祝日の場合は翌日）と年末年始休館。入場料は大人200円、中学生以下無料。☎052(936)3836



# 東山植物園温室（前館）

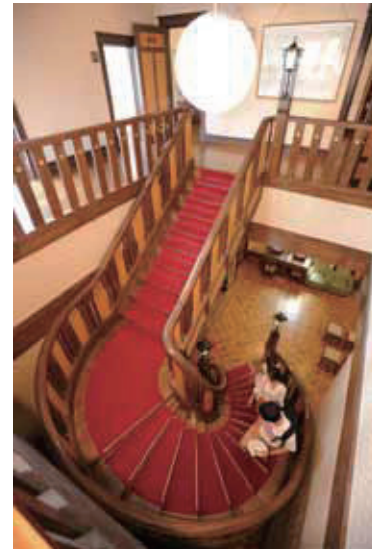
総ガラス張りの水晶宮を目指した日本最古の現存温室

「東洋一の水晶宮」とたたえられた大温室は、今も華麗な姿を保っていた。

高さ12メートルと最大のヤシ室を軸に、5つの温室が左右対称に並ぶ。平等院鳳凰堂（京都府宇治市）のようだ。ガラスと鉄による造形が、角度によって多彩な表情をみせる。

1936年（昭和11年）に建設され、現存するものでは日本最古の本格的な温室とされる名古屋市東山植物園温室（前館）である。

大温室は、名古屋市が新たに造る植物園の目玉として計画された。後館は木造（現存していない）としたが、観賞



曲線が美しいらせん階段

スは、日本のグラフィックデザイナーの先駆けで、桃介の義弟の杉浦非水が描いた。だが、何より豪華だったのは電灯・電気設備だ。室内に多くの照明が付き、屋根の上には夜に庭を照らすサーチライトまであった。各部屋に電気仕掛けの呼び鈴が設けられ、停電時には自家発電装置が動いた。今考えても最先端の電化住宅で、夜も光り輝く二葉御殿は電気へのあこがれをかき立てた。



階段の手すりにつけられた電灯

大広間では、政財界人を招いて度々宴会が開かれ、体の弱い桃介に代わり、貞奴が夜遅くまでもてなして、桃介の水力発電を後押しした。1924年（大正13年）、日本初の本格的なダム式水力発電所となる大井発電所（岐阜県）が完成し、桃介の名古屋での事業はヤマを越えた。その年、貞奴も新たな夢へ向け、桃介の支援で、東京・青山に「川上児童楽劇園」を開校した。

二人の活動拠点が東京に移り、二葉御殿での同居生活はわずか5年で終わった。

## 「二葉館」として一般公開

二葉御殿はその後、大同特殊鋼の社員クラブなどになっていたが、名古屋市に寄付された。白壁から榎木町に移築・復元され、2005年（平成17年）から「二葉館」として公開されている。「電灯がまだ珍しかった時代で、電力王の家はさぞ注目を浴びたでしょうね」。二葉館の高橋伸子さんが言った。原子力発電所の事故で、節電の求められる昨今だが、光り輝く電気があこがれだった時代のあったことは記憶しておきたいと思った。

用の珍しい植物を多く植える前館は、鉄骨造り総ガラス張りの「水晶宮」を目指した。設計者には、東京帝国大学建築学科を卒業、35年（昭和10年）6月に名古屋市建築課に入った一圓俊郎（後に建築局長）が、入庁翌日に指名された。異例の抜てきだった。

## 全溶接工法で設計

「水晶宮」（クリスタル・パレス）はもともと、世界初の万国博覧会だった1851年のロンドン万博で、人気を集めた鉄骨造り総ガラス張りのメイン会場に、雑誌が付けたニックネームだ。

## ●アクセス

地下鉄東山線東山公園駅から徒歩3分、または星ヶ丘駅から徒歩7分（植物園は星ヶ丘門が便利）。東名高速道路名古屋ICから車で15分。

●東山動植物園（名古屋市千種区東山元町3-70）

入園時間9:00～16:30。毎週月曜（祝日の場合は翌平日）と12月29日～1月1日休園。観覧料は大人500円、中学生以下無料。定期観覧券（1年）2000円。☎052（782）2111

\*温室（前館）は、保存修理のため、2018年度の再オープンまで、見られません。





電気溶接で施工された鉄骨造りのアーチを支えられている

現場責任者だった竹内勝治は、大温室が2006年（平成18年）に国の重要文化財に指定された。

開園75周年だった。ヤシ室に入ると、見たことのないほど太いインドゴムノキが植わっていた。開園当時の植栽で、そんな古参が13種類も残っているという。

### 建設当時の姿に復元目指す

2012年（平成24年）は開園75周年だった。ヤシ室に入ると、見たことのないほど太いインドゴムノキが植わっていた。開園当時の植栽で、そんな古参が13種類も残っているという。

て、全国でも松尾橋、梁、大阪工場など数少ない中での決断だった。設計を任されて半年後、設計図ができあがった。

### 飛行機の格納庫を参考に

古屋市の北川組だ。電気溶接も地元の上田工業所が担当した。北川組はそれまでに、陸



1936年に完成。現存する温室では日本最古の東山植物園温室



高さ12mと最大のヤシ室を軸に5つの温室が左右対称に並び

設計したのは英国の庭園技師で、すでに温室で導入され始めていた技術を応用した。万博の数年前に完成し、世界の代表的な温室とされた英ロンドン郊外のキューガーデン（王立植物園）・パームハウ

光をできるだけ入れられるため、電気溶接でできないか」電気溶接には当時、規制があつて、軍や鉄道施設以外ではほとんど使われていなかったが、一圓は押し切った。全溶接工法は名古屋市では初め

た際、北川組に送った手紙で「（温室の）建て方は格納庫（の骨組み）を参考にした」と明かしている。

それでも、電気溶接でつないだ鉄骨はリベットに慣れた工事関係者には頼りなく、鉄骨柱を地盤から直接立てるのではなく、まず鉄筋コンクリートの柱を立て、それに鉄骨をつなぐ工夫をした。

大温室は1936年（昭和11年）8月に完成、植栽を終えて翌37年（昭和12年）3月に植物園がオープンした。

2012年（平成24年）は開園75周年だった。

ヤシ室に入ると、見たことのないほど太いインドゴムノキが植わっていた。開園当時の植栽で、そんな古参が13種類も残っているという。

スも、鉄骨造り総ガラス張り、その後の温室設計者はこぞって手本とした。

しかし、英国に渡る時間はない。一圓が訪れたのが、パームハウスがモデルとされ、すでに完成していた兵庫県宝塚植物園の大温室だった。

当時は、鉄骨をつなぐ際はリベット（鉋）で締めるのが普通だった。それを見た一圓は考えた。「リベットで締めると、（鉄骨のつなぎ目が太くなり）影ができる。直射日光をできるだけ入れられるため、電気溶接でできないか」

見上げると、三角形を組み合わせたトラス構造の鉄骨で造られたアーチがあつた。溶接ならではの細いラインが印象的だ。「水晶の館を支える骨組みですが、美しい曲線でしょう」。植物園長の伊藤悟さん（55）が言った。

名古屋市の「東山動物園再生プラン」では、大温室は2013年から本格的な保存修理が始まるため、12年秋から温室内の植物もいったん植え替えられた。保存修理では、耐震補強に加え、建設当時の資料を集めて、可能な限り当初の姿を復元する考えだ。再オープンには2018年度（平成30年度）の見込みという。

復元される大温室は楽しみだが、今の温室をもう一度見ておこうと外に出た。